

河北新報【夕刊】

2007年2月16日(金曜日) 掲載

技術に折り紙、自立へ一歩



和を意識したデザインの新しいすし券と菅井工場長

全国で流通するすしの食事券(すし券)のデザイン一新に合わせ、仙台市太白区の身体障害者福祉工場「秋の郷福祉工場」(社会福祉法人共生福祉会)が印刷業務を一手に受注することになった。職員は、印刷技術や品質の高さが認められたことに自信を深めるとともに、全国で「自社製品」が使用されることを喜んでいる。

仙台 福祉工場「秋の郷」

福祉工場は、身体障害者にバリアフリーの職場を提供し、自立自立を目指す施設。職員九十人のうち、四十人が身体障害者だ。生産施設とは違い、基本的には独立採算制で、「秋の郷」では印刷のほか、機械部品の製造、部品の修理もある。印刷部門はこれまで、県内、隣県の学校や行政のパンフレット、自費出版本などを発行してきた。全館で流通するような製品を印刷するのは初めてだ。「全国すし券を印刷する」という

年100万枚生産 職員に自信

「秋の郷」は、デザインや発注管理システムを委託して、最終的には多岐宮市の印刷会社を頼って受注を決めた。新しいすし券は「和」を意識した美しいデザインで、偽造防止用のホログラムもつけた。「秋の郷」は二〇〇四年に品質マネジメントシステムの国際規格「ISO9001」の認証を取得し、品質も保証された。年間100万枚の受注が想定されるという。今日一日の受け付け開始以降、既に十二万枚を受注した。一日一万枚程度の印刷が限度なだけに、職員は仕事に誇りを感じている。

菅井徳夫工場長は「福祉工場だと品質が多分悪く思われがちだが、全国規模の仕事が取れたことは、一つのステータスになる。職員の励みにもなった」と話している。

全国すし券印刷を受注